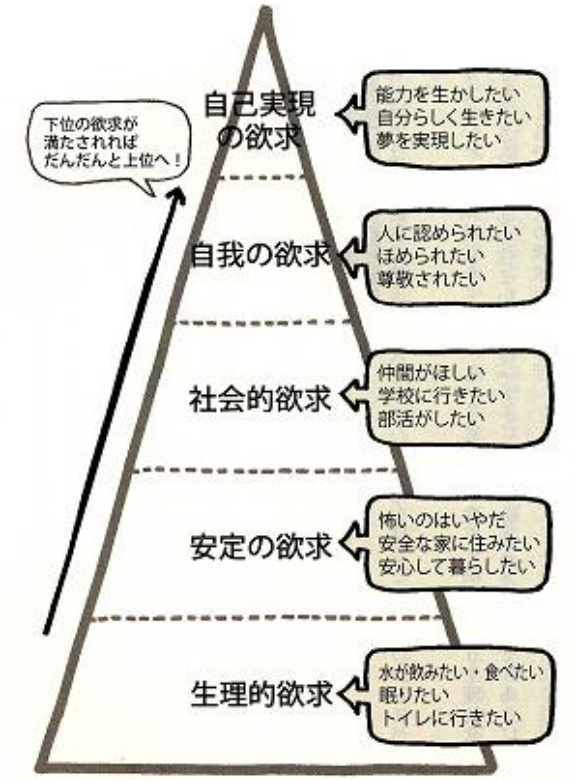
マズローの欲求階層説

～ 東日本大震災後の人間の欲求の流れ ～

2011 年3月 11 日、東日本の太平洋岸を襲った巨大地震と津波、さらにそれに続く福島の原発事故は、その地に暮らす人々の生活や仕事を一瞬にして奪い去りました。

「命だけは助かった。」避難したり、救助を待ったりしていた人のその時の気持ちは、そのひと言だったのではないでしょうか。命が助かったという思いの次にやって来るのは、「お腹がすいた。何か食べたい」となることでしょう。すさまじい被害を目の前にしても、空腹を満たしたい欲求は悲惨な状況とは別に否応なくやってきます。



避難３日目ぐらいまでは、「お腹が満たせれば何でもいい。ぜいたくは言えない」と思っていますが、４日目、５日目になり気持ちが落ち着くと「温かいものが食べたい。栄養のあるものを食べたい」に変わってきます。食べることだけではなく「足を伸ばして休みたい」「温かい布団で寝たい」「プライバシーがほしい」など生活環境の欲求も出てきます。

何週間か過ぎれば、「美味しいものが食べたい」「お酒も飲みたい。煙草も吸いたい」「仮設でいいから、ちゃんとした家で暮らしたい」と欲求は高くなってきます。

そして、大人たちは「仕事がしたい」「何か復旧・復興に役立つことがしたい」、児童や生徒は「勉強がしたい」「思いっきり外で遊びたい」「部活をしたい」と思うようになるのです。このように状況の変化によって人間の欲求も変化するのが自然なのです。

アメリカの心理学者エイブラハム・マズロー（1908～70）は、ある欲求がいったん満たされると、他の欲求の追求に移る。そして、このプロセスが続いていくという欲求段階説を 1943 年に発表しました。それぞれの欲求を満たしていけば、その先には自己実現の欲求があります。「もしも究極的に平和であれば、音楽家は曲を書き、芸術家は絵を描き、詩人は詩を書くに違いない。人はなりたいものになるだろう」とマズローは言っています。

資料番号：1-11-2	出所：高木克純(2011)『中学教師が教える「したたかに生きる」ための経済の授業』中経出版 『日経産業新聞』2011 年 8 月 3 日付